From 長野

国宝 旧開智学校校舎と松本城、2つの国宝をめぐる

擬洋風建築の特徴を今に伝える旧開智学校校舎。昭和38年に現在地に移築された

長野県のほぼ中心に位置する松本市は、自然豊かなアルプスに囲まれた旧城下町。街の中には多くの歴史的建造物が現存している。今回は、旧開智学校校舎と松本城、二つの国宝をいただく「長野の魅力」に迫る。

文明開化の始まりを伝える擬洋風建築

令和元年９月、近代学校建築として初の国宝に指定された旧開智学校校舎。明治９年に建てられ、昭和30年代まで90年近く小学校校舎として使用された建造物で、改めてその価値に注目が集まっている。

旧開智学校校舎の大きな特徴は、和風と洋風が混ざり合った“擬洋風建築”のデザインだ。擬洋風建築とは、明治初期に日本人が西洋風の建物を模して建てた建築物のこと。当時は西洋建築への理解や材料が不十分だったため、大工職人たちがそれぞれに創意工夫し、和風、洋風、寺院風など様々な要素が入り混じった独特の建築物が誕生した。文明開化の象徴的存在として、学校やホテル、銀行、庁舎など多数の建造物が“擬洋風”の建築様式で建てられた。

旧開智学校校舎を手がけたのは、地元の大工棟梁であった立石清重（たていしせいじゅう）だ。立石は東京や横浜などに出向いて、当時最新の洋風建築を見学し、そこで得た知見をもとに校舎を設計。その独創的なデザインや校舎としての先進的な計画性が高く評価されている。

なかでも擬洋風建築の特徴をよく表しているのが、校舎正面車寄せのデザインだ。八角形の塔やステンドグラスの窓、バルコニーなど西洋建築の意匠を取り入れながら、漆喰塗りの外壁や唐破風（からはふ）など和の技法も駆使。竜の上に瑞雲（ずいうん）が広がり、２人の天使が看板を掲げ持つという独創的なデザインは、新しい学校のみならず、明治という新たな時代の幕開けへの期待を表しているようにも感じられる。校舎内も和紙をあしらった天井やモダンな照明、隣接寺院から転用された和風彫刻が施された扉など、和洋が融合した独特の建築美を随所に感じることができる。

校舎正面は竜と雲、天使があしらわれた独特のデザインに。新時代への希望を感じさせる

旧開智学校校舎は、災害や環境改善のため何度か改築されているが、昭和38年に市街地を流れる女鳥羽（めとば）川のほとりから現在地に移築した際に、新築当時の形に近づけて復元。昭和40年4月から校舎の公開と教育資料を展示する博物館としての役割も担い、ミュージアムとしても高く評価されている。

地域住民によって作り、守られた近代教育の歴史

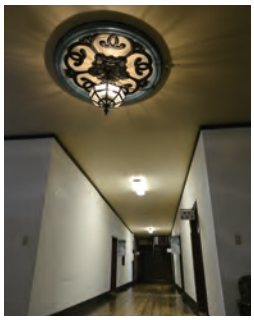
旧開智学校校舎は、近代教育の黎明期を象徴する校舎としても極めて貴重な存在である。明治5年（1872）に発布された学制では、学校の校舎は「務メテ完全ヲ期ス」ことが求められたが、細かい規定・規格などはなく、全国の学校校舎の多くが寺院や空き家を転用したものだった。こうした時代に旧開智学校校舎は中廊下によって各教室を独立させ、全部

で32部屋あった教室を当時としては広めの3間×4間（約5.5メートル×7.3メートル、約40平米）というサイズで統一。非常に機能的な設計が施されていた。校舎の建築費の７割を学区内の住民が負担したというエピソードも残されており、新たな時代を自分たちの手で作ろうとする住民たちの熱意を込めた学び舎だったことを伺わせる。

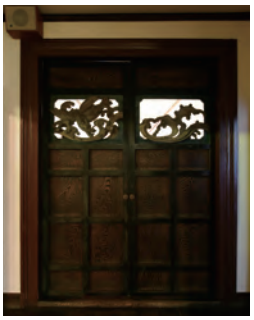
地域住民にとって愛着ある貴重な校舎だったこともあり、旧開智学校校舎は創建から90年近くもの間、現役の校舎として大切に使用されてきた。近代建築の保存意識が低い時代から校舎を大切に使用し、移築復元後も保存修理などの整備を続けてきた校舎保存の取り組みも文化財としての価値を高めている。

館内には、各時代の教科書や教材、学校日誌、卒業証書など日本の近代教育の歴史を伝える教育資料も多数展示されている。旧開智学校は、丁稚奉公の子どもたちに対する子守教育や、能力別学級編成などそれぞれの子どもの事情に即した教育も展開。各時代の教員が子どもたちと真摯に向き合ってきた様子も展示資料から読み解くことができる。

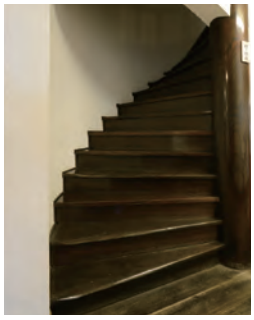
国宝指定を契機に、旧開智学校の来場者数はそれまでの1.5倍に増加した。貴重な歴史遺産が再注目されている。



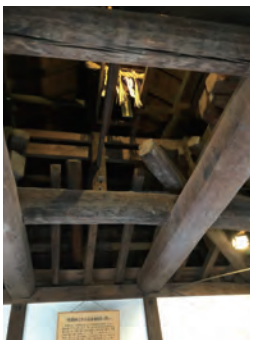
5枚重ねの和紙を貼った天井を飾るモダンな照明。このデザインも立石が手がけた



波形・飛龍の木彫りが施された桟唐戸。廃仏毀釈となった浄林寺の扉を転用したもの



どっしりした丸柱に支えられた回り階段。アールの下り壁にも洋風建築のテイストが漂う



井桁梁でがっしりと組まれた天守最上階の天井。中央には松本城の守護神である二十六夜神が祀られている

大天守と乾小天守を渡櫓でつなぐ「連結式」、大天守に辰巳附櫓と月見櫓を付けた「複合式」を併せ持つ連結複合式天守は、松本城のみの特徴

松本城下町の中町通り。白と黒の“なまこ壁”の建物が連なり、風情を感じさせる

現存する五重六階の天守で日本最古の松本城

旧開智学校校舎から歩いて５分、松本市のもう一つの国宝として親しまれているのが松本城だ。松本城は戦国時代の永正年代初頭に信濃守護小笠原氏が築城した深志城が始まり。現存する五重六階の天守のなかでは日本最古の歴史を持っている。その特徴は、大天守・乾小天守・渡櫓・辰巳附櫓・月見櫓の５棟からなる連結複合式天守。日本の城では松本城だけに見られる特色ある構造となっている。黒い堅固な天守は戦国時代に戦うために築かれたもので、辰巳附櫓と月見櫓は泰平の世になってから増築。造形の違いから歴史の変遷も見ることができる。天守は最上階の大天守六階まで上ることができ、天気のいい日には北アルプスを一望できる素晴らしい景観を楽しめる。

2017年からは松本市市制施行110周年記念事業として制作されたVRアプリも配信している。エリア内にVRスポットを設置し、その場に近づくとVRと解説アナウンスが起動。江戸時代の絵図や記録をもとに松本城の江戸時代の姿を再現し、焼失した本丸御殿や二の丸御殿などもリアルに紹介している。

交通の要所だった松本は城下町も古くから栄えた。かつては女鳥羽川を境に、北部が城郭と武家住宅地、南部が町人の居住エリアとして区分。川の北側にある縄手（なわて）通りは、縄のように細長い土手に由来してその名がつき、現在は古民具店や骨董品店、駄菓子屋が連なる昔懐かしい風情が漂う。川の対岸にある中町通りは、“なまこ壁”と呼ばれる土蔵造りの建造物が建ち並び、土蔵造りの建物には民芸品や工芸品の店、カフェなどが営業し、活気ある雰囲気を醸し出している。

市民が誇る歴史資源を生かし、新たな形でその良さを発信している松本市。市内を散策すると、あちこちから街の魅力を感じることができる。

取材・写真協力／旧開智学校校舎、松本城管理事務所、松本観光コンベンション協会